御伽草子25作品における人称詞「殿」の用法

田澤志人

1　はじめに

本研究は、御伽草子[注1]を資料として、人称詞の使い分けを、対称詞を中心に詳しく調査し、整理したものである。待遇表現研究には、人称代名詞を、敬語を中心とした文末表現と共起するものとし、語の共用関係を表にまとめる方法[注2]がある。しかし御伽草子は語り手や書き手の位相が不詳なことが少なくなく、作品によって用いられる語彙の傾向もさまざまである。登場人物の身分のみで使用される語彙が一定しているわけではなく、同一人物に対する1つの発話内にあっても別の人称詞が使用されることが少なくない。同時代の狂言資料などと比べても、その使用実態は複雑である[注3]。そのため、前述した研究方法を単純にそのまま用いることは適さないと考えた。ゆえに、本研究ではそれらに加えてさらに、心理的な関係性にも注目し、語の使い分けを整理することとした。なお、本稿では紙幅の都合上、全ての語彙の詳細な調査内容を述べることができないため、「殿」関連語彙のみを詳しく述べ、代名詞の各語彙との違いを示す。

2　調査の概要

調査対象作品は次の25作品である。

「福富長者物語」「あきみち」「熊野の御本地のさうし」「三人法師」。以上『日本古典文学大系　御伽草子』[注4]より。「浄瑠璃十二段草紙」「天稚彦草子」「俵藤太物語」「岩屋」「明石物語」「諏訪の本地」「小男の草子」「小敦盛絵巻」[注5]「弥兵衛鼠絵巻」。以上『新潮日本古典集成　御伽草子集』より。「転寝草紙」「かざしの姫君」「猿の草子」。以上『新日本古典文学大系　室町物語集（上）』[注6]より。「弁慶物語」「窓の教」「乳母の草紙」「師門物語」。以上『新日本古典文学大系　室町物語集（下）』[注7]より。「御曹子島渡」「浦島の太郎」「磯崎」「中将姫本地」「長宝寺よみがへりの草紙」。以上『新編日本古典文学全集　室町物語草子集』[注8]より。

この25作品は、「渋川版御伽草子」の23作品とは別の作品[注9]を

選択した。「渋川版御伽草子」の23作品は宮武（2003）[注10]によって、すでに人称代名詞についての詳細な研究がなされているためである。

さて、右の25作品で用いられていた人称詞とその数をまとめたのが表1である。調査対象とした対称詞や対称詞群をあげ、それぞれにおける各作品ごとの数を示した。対称詞は全部で481例あったが、対称詞がほとんど用いられていない作品も多く、「小男の草子」には1例も存在しなかった。

表1の対称詞の説明をする。まず、151例と最も数の多い「属性表現」としたものについて説明する。「属性表現」とは、職業、性別、続柄など、その人物の持っている社会的な身分や属性、性質を表す言葉で、人物呼称表現として用いられている「殿」や「御坊」などを指す。本研究において便宜上、「属性表現」として仮に私が定義した。人物呼称表現を網羅するためには、代名詞を見るだけでは不十分であり、このような呼称表現も取り上げる必要があると考える。なぜなら現代でも「先生」「お姉さん」「父さん」のような言葉を対称の呼称として用いるからである。属性表現はその種類が多く、この表にその全てを項目立てて載せると煩雑でわかりにくくなってしまうため、「属性表現」として1つの項目にまとめた。その

表1

作品名 ＼ 対称詞（群）	熊野の御本地のさうし	俵藤太物語	天稚彦草子	諏訪の本地	岩屋	弁慶物語	福富長者物語	窓の教	浄瑠璃十二段草紙	かざしの姫君	乳母の草紙	転寝草紙	長宝寺よみがへりの草紙	小敦盛絵巻	三人法師	師門物語	中将姫本地	御曹子島渡	明石物語	猿の草子	浦島の太郎	磯崎	弥兵衛鼠絵巻	小男の草子	あきみち	総計
御身	5	4			1	6		1	5	1	8	1	1	1	3	6		3	4		3	2	1		16	72
汝	4	3		1	2				9				13	3	1	9	10	2	4							61
君		2				1		1	24	1		1		1	1	4	4	6	5			1	1			53
御辺		4		2		6									1	1		2								16
御分						10									3											13
おこと		2		4													1									7
複数の人物へ		1		1		2		1	1					2	2	4		3	2	2						21
その他代名詞		2			1			1				1	1					1		1		1			1	10
自称詞の転用			1		1	5								1		1			2			1	1			13
指示詞の転用						1	2	1											2							6
属性表現	1	2	1	2	3	47	1	4	21		1	1		2	14	6	2	18	9	1	1	3	2		9	151
名前＋接尾辞				2		13				1			1	2		3			6	3			2			33
名前呼び捨て	1			6		1	1		2							5	1	2	2			3			1	25
総計	11	20	2	18	8	92	4	9	62	3	9	4	16	12	25	39	18	37	36	7	4	11	7	0	27	481

表 2

作品名 / 属性表現の内訳※	熊野の御本地のさうし	俵藤太物語	天稚彦草子	諏訪の本地	岩屋	弁慶物語	福富長者物語	窓の教	浄瑠璃十二段草紙	かざしの姫君	乳母の草紙	転寝草紙	長宝寺よみがへりの草紙	小敦盛絵巻	三人法師	師門物語	中将姫本地	御曹子島渡	明石物語	猿の草子	浦島の太郎	磯崎	弥兵衛鼠絵巻	小男の草子	あきみち	総計
殿				1		8	1		10									1	7						8	36
御坊						24										1										25
冠者						2			3									11								16
尉															7											7
人															1	1		3			1				1	7
僧						1			1						3							2				7
女房						1			5																	6
姫								1	2		1							1								5
聖	1															3										4
御前						2		1																		3
母					2																	1				3
父														1			2									3
上臈								1							2											3
上人														1	1											2
御曹司						2																				2
男						2																				2
他※		2	1	1	1	5		1				1				1		2	2	1			2			20
総計	1	2	1	2	3	47	1	4	21	0	1	1	0	2	14	6	2	18	9	1	1	3	2	0	9	151

※この内訳には、それぞれの語に接頭辞「わ～」や接尾辞「～たち」「～ども」「～ばら」「～君」などがついた派生語と、何らかの修飾語を伴った表現を含めている。しかし、接尾辞用法としてその語が用いられた用例の数は含まない。

※「他」は、１例ずつしかなかった「権守」「衆徒」「父母」「大師」「朝家」「鎮西の行者」「若者」「島人たち」「太夫」「若党」「おうぢ」「者」「人」「局」「法師」「白鼠」「翁」「中将」「子」「鬼坊」の20表現である。

内訳は表2に示したとおりである。「複数の人物へ」は複数の人物への対称詞で「属性表現」に含まれないもので、具体的には「面々」「方々」「人々」「皆々」である。「その他代名詞」は代名詞であるが数が少ないもので、「身」「人」「貴方」「その方」「御寮」である。「自称詞の転用」は本来自称詞であるが対称の人称詞として用いられたもので、「おのれ（ら）」「われ」「みづから」である。「指示詞の転用」は本来指示詞であるが対称の人称詞として用いられたもので、「そこ」「そなた」「それ」である。「名前＋接尾辞」は人物名に接尾辞を伴っているものであるが、人物名のようにして「刑部」といった官職名や地名を用いているものが多くあり、「属性表現」との区別が難しい。そのため、属性表現に接尾辞を伴っているものも合わせて取り上げた。「名前呼び捨て」は名前を呼び捨てているもので、こちらは確かに人物名であるものに限ることとし、「属性表現」か名前かの判断が難しいものは「属性表現」の中に数えた。

作品の順番は『お伽草子事典』[注11]における推定成立年代（幅がある）を参考にしておおよそ時代順になるように並べた。一番左が最も古く、右に行くほど新しい。間にある太線は、おおよその時代区分の区別を表している。左から、「鎌倉後期～室町前期」、「室町中期」「室町後期」「室町末期」「近世（江戸）初期」である。しかし、作品ごとに推定年代の幅が広く、厳密なものではない。

3　調査と考察

（一）殿〈との〉

全ての対称詞の全用例を調査し考察を行ったが、本稿では紙幅の都合上、その中から特に注目したものとして、属性表現内の「殿」の関連語彙について用例をあげながら詳述する。その内訳は、表3にまとめた。

「殿」についての先行研究として、辞書の記述を引用する。『日本国語大辞典』の「との」の項には、

③中世以降、主君、主人をさしていう。（初出は源平盛衰記）④妻から夫をさしていう敬称。（初出は宇治拾遺物語）⑤女から男をさしていう。やや敬っていういい方。とのご。（初出は虎明本狂言・二人大名）

とあり、語誌欄には、

(1)もともとは貴人の邸宅の意だが、のちには邸宅とその住人の両方を表わすようになる。さらに、貴人の名を直接表現することを避ける風習により、住人だけを表わすようになったが、「殿」で称される人物が増加するとともに「殿」の表わす敬意の程度は低下した。

(2)社会的な高位者に対する呼称から、相対的上位者、すなわち表現者よりも高い地位の者に対する呼称として用いられるようになり、たとえば、従者が主人に、妻が夫に、女が男に対して用いることになる。

と書かれている。また『時代別国語大辞典』には次のように書

表3

作品名 ＼ 「殿」関連語彙	熊野の御本地のさうし	俵藤太物語	天稚彦草子	諏訪の本地	岩屋	弁慶物語	福富長者物語	窓の教	浄瑠璃十二段草紙	かざしの姫君	乳母の草紙	転寝草紙	長宝寺よみがへりの草紙	小敦盛絵巻	三人法師	師門物語	中将姫本地	御曹子島渡	明石物語	猿の草子	浦島の太郎	磯崎	弥兵衛鼠絵巻	小男の草子	あきみち	総計
殿						3																			3	6
～(の)殿						1	1		10									1							5	18
わ殿						2																				2
殿ばら				1		1													2							4
殿ばらども						1																				1
わ殿ばら																			5							5
接尾辞の殿				2		12			3	1				1	7	3		2	6	3			3			43
総計	0	0	0	3	0	20	1	0	13	1	0	0	0	1	7	3	0	3	13	3	0	0	3	0	8	79

かれている。

①身分の高い人の敬称。②その人にとっての主君とか、妻にとっての主人とか、その土地、家などの長とかの敬称。「とのさま」。③女性から男性を指して、親しく敬愛をこめていう語。→とのご。

『日葡辞書』の「Tono」の項には、

ある土地の主君。または、臣下や領地などを持っている主君。¶また、夫。身分のある婦人が自分の夫を言うのに使う語。

とある。これらを総合すると、主従関係か男女関係において、相手を敬った表現ということが言えよう。だが『狂言辞典語彙編』には、

男子の敬称。「これの甥の殿こそ狐を釣らるれ」（釣狐）

とあり、語の使用される人間関係には詳しく触れられていない。また、「との」関連語についてその変遷を追った菊田（1983）[注312]には、次のように書かれている。

「との」の敬意が下落して「とのばら」や「わどの」も多用されるようになると、室町末期以降の上方語では「との」は男子の敬称としても用いられ、「とのご」まで現われる。「ご（御）」をつけて敬意をつけ加えているのである。

菊田によれば、「殿」で呼ぶ対象となる人物は本来、高貴な人物に限られていたが、語の敬意が徐々に低下し、室町末期の上方語では「男子の敬称」としても用いられるようになったとい

う。しかし、主人や大名などに対し、「殿御」や「殿様」といった派生語として敬意を補った例が紹介されており、「殿」単独での用例はあげられていない。そのため、身分などの絶対的な指標によって「殿」の使用が制限されたか否かが明確でない。

以下、用例を確認する。今回収集した全用例中、「殿」関連語彙は先に表3で示したように79例あった。その中でも「殿」単独での用例は6例、「～（の）殿」という複合語形で用いられたものは18例あった。これまで確認した内容と直接的に関わりがあるのは、これら計24例である（接辞を使った「わ殿」「殿ばら」などの派生語は別のニュアンスを持つため、本稿では紙幅の都合上省略する。接尾辞の「殿」は後述する）。そのうち、「弁慶物語」「御曹子島渡」の全用例と、「浄瑠璃十二段草子」の1例を除いた18例が男女間で用いられている。

まずそのなかから、「あきみち」において単独で用いられている3例を次にあげる。

「さても殿は京をはせませし御留主の事なれば」（北の方からあきみちへ、旧大系396頁）

「殿は酒に酔はせさふらふか」（北の方から金山へ、旧大系406頁）

「殿の敵とはいひながら、また子の親をむざんなることをしてさふらへば」（北の方からあきみちへ、旧大系410頁）

どれも、夫婦間において、妻から夫への敬意を伴った表現である（この北の方は、あきみちの妻であるが、あきみちの親の仇である金山を謀殺するために金山の妻となった）。

しかし、「あきみち」において用いられた残りの5例（いずれも複合語形）は、1例を除き特殊な用法である。次に示す。

「今めかしき殿の仰せかな」（北の方からあきみちへ、旧大系396頁）

「現（うつつ）なの殿の仰かな。世にも例無き、聞きもならはぬ御謀かな」（北の方からあきみちへ、旧大系397頁）

「おろかの殿の仰言かな」（北の方からあきみちへ、旧大系398頁）

「おろかの殿の仰言や」（北の方から金山へ、旧大系408頁）

「久しき殿を思ふ故に、女の身として恐ろしきことをたくみて」（北の方からあきみちへ、旧大系409頁）

最後の1例を除く4例における「殿」は、「殿」すなわち対者の「仰せ（言）」を修飾する橋渡し程度の意味しかなく、「殿」がなくても意味は通る。例えば「今めかしき仰せかな」とあってもそのまま通じる。この4例では、「殿」を含むことによって婉曲的に表現したのではないだろうか。男女間ではないが、「弁慶物語」においても、

「腹悪しの殿の気色や」（弁慶から吉内左衛門へ、新大系下274頁）

という同様の表現が1例あり、これを含めた5例とも「今めかし」「現なし」「おろかなり」「腹悪し」というマイナスイメージの感想を述べている。そこでの「殿」はもはや、代名詞あるいは「人」や「者」のような形式名詞に近いものとして用いら

れているということではないだろうか。

なお、いま除いた「久しき殿」の1例は、句形こそ似ていたが、下に被修飾語が続く表現ではなく、これらの5例とは異なる。辞書の記述にもあった、夫に対する敬称である。このように形容詞によって修飾されていた例は、「福富長者物語」にも

「よい殿や〳〵」（妻の鬼うばから夫の藤太へ、旧大系388頁）

と、1例あった（『時代別国語大辞典』の③の用例としても取り上げられている）。

ここまで、男女間で用いられていた「殿」18例中、「あきみち」の8例と「福富長者物語」の1例を見てきた。残る9例は全て「浄瑠璃十二段草子」の用例である。そのうち、「都の殿」7例、「旅の殿」1例の計8例が作品のヒロインである浄瑠璃やその女房たちから源義経に対する呼びかけとして用いられている。これらの用例はどれも似ているため、ここでは「都の殿」の2例のみ紹介する。

「旅の御つれづれをも慰め給へや。都の殿」（女房たちから義経へ、集成33頁）

「いかにや候ふ都の殿」（浄瑠璃から義経へ、集成50頁）

これらの例は、辞書の記述どおりに目上の貴人（男性）に対して女性が用いたものと思えるが、そうではない。なぜなら、浄瑠璃や女房たちは義経を目下の者として扱っていたことが他の人称詞から次のように窺えるからである。源氏の貴人かもしれないと疑うことこそあったが、義経は名乗らず、金売吉次の下人として「殿」と呼ばれていた。後に義経が名乗ると浄瑠璃は義経に対して「殿」ではなく「君」を用いた。本稿では詳しく取り上げないが、「君」は身分の高い相手に対し強い親しみと敬意をもって用いられる表現である。また、男女の関係でも用いられる。だが、男女の関係になった後でも浄瑠璃は、義経が名乗る前に一度「都の殿」と呼びかけている。そのため、二人が男女の関係になったことだけが原因で対称詞を「殿」から「君」に変えたのではないと考えられる。このことから、「君」を用いるようになったのは浄瑠璃が義経の身分の高さを知って敬意を表したからであり、逆に「殿」には高い敬意が含まれていないと推定できる。

男女間の残る1例を次にあげる。特に名前も与えられていない目下の男性に対しての呼びかけである。

「いかに候ふ、浦の殿」（浄瑠璃から浦の者へ、集成63頁）

この例は、田子の浦にいる「浦の人」に対し、地方の長者の娘である浄瑠璃が、義経の行方を「教へて賜べ」と尊敬語を用いて尋ねたものである。また、男女間の使用ではないが、よく似た例があるため次に示す。

「いかに候ふ、主（あるじ）の殿」（金売吉次から宿の亭主へ、集成58頁）

この例は「宿の主人」に対し、病の義経を世話するようにと金売吉次が頼む際に呼びかけたものである。吉次はやや自尊的に振る舞いながらも「看病して賜び給へ」と宿の亭主に尊敬語を用いている。「主の殿」も「浦の殿」も貴人ではないし、主

従や男女の恋愛関係もない。それでも頼み事をする場面で相手に敬意を表すために使用されていたのであろう。

下人としての義経、「浦の人」や「宿の主人」といった特に身分の高くない人物に対するこれらの例によれば、「殿」は絶対的な身分による上下関係ではなく、その場の心理的条件や発話態度によって用いられているように思われる。このような指摘は、どの辞書にも見つけることができなかったものである。

男女間において用いられた18例を中心に見てきたが、辞書にある、男性への敬称（目上へ）であったものは5例にとどまった。

男女間ではない残りの6例も辞書の記述とは異なり、身分差が見られない（すでに示した「腹悪しの殿」「主の殿」も含む）。

「弁慶物語」の4例（前に示した「腹悪しの殿」も含む）は、身分の上下がなく、敵対した男性同士での使用例であり、全て相手を揶揄している。ここでは特徴的な1例のみをあげる。

「何かと腹立ち給ふぞや。殿」と言ふて、あざ笑ひければ、

（弁慶から吉内左衛門へ、新大系下275頁）

作品内で弁慶は同じ相手に対し、「御辺」や「御分」をも用いている。そのときは、敬意をより丁寧に含ませた発話であり、それらの表現で呼びかけることによって相手をおだてていた。しかしこの「殿」は、直後の地の文にあるように、相手を「あざ笑」うときに用いられている。貴人に対し敬意を示す語として用いられていない。むしろ、貴人に対して敬意を示す性質を利用することで相手を効果的に嘲っているように思われる。この例は、「殿」が絶対的な敬意の高さを持たないことや、あまり丁寧ではなく日常的な表現であったことを意味しているのではないだろうか。

残る1例は「御曹子島渡」における「都の殿」（新全集100頁）という呼びかけである。これは小人島の住人（男性）から義経に対して用いられているが、身分差は描写が乏しく判然としない。これまでの傾向から考えるなら、貴人としての義経への敬称ではないかもしれない。この物語で義経は、後に自分のことを「日本のくはんきょ（冠者の意）」と呼ぶ相手のことを「正直なる者」とよく評価し、助けている。このことも、「殿」では充分な敬意を表せないことを示しているのかもしれない。

「殿」は御伽草子において、絶対的な身分による上下には無関係に、「男性」に対して広く用いることができたようだ。むしろ、心理的な上下関係によって相手に敬意を示すため、相手が貴い男性である必要はなく、知らない相手にも親しい相手にも用いられる。敬意は表されるが、それは必ずしも高いものではない。このように明確な敬意や身分などの限定的用法を持たず、「人」や「者」と同程度の意味でも使われるためか、「～（の・する）殿の…」や「～（の）殿」などの形式化した表現で用いられる傾向も見られた。

（二）殿〈どの〉

次に「殿」の関連表現として接尾辞的用法の「殿」について

述べる。まず『日本国語大辞典』の語誌欄を引用する。

平安期、「殿」の表す敬意が低下し、接尾語としての用法も発生した。しかし、官職名を持つ人物に対して、その官職名に付ける用法であったが、鎌倉末期には官職名を持たない人物に対して、人名に付ける用法も起こり、「殿」の敬意は更に低下した。そして、「殿」に代わって十分な敬意を表せる「様」の使用が盛んになる。

「殿」「様」からそれぞれ転じた「どん」「さん」は江戸後期に多用されるが、「どん」よりも「さん」の方が表す敬意は高かった。町人言葉の「どん」は親しみを伴った敬称ではあるが、奉公人に対してだけ用いられたのに対し、「さん」を用いる対象は広く、「どん」は勢力が拡大しないまま衰退した。

『時代別国語大辞典』には次のようにある。

氏名・官名・職名などに付けて、その人に対する敬意を表わす。

接尾辞適用法の「殿」は、辞書にも敬意の低下や貴人以外へも用いられたことが書かれている。

菊田（1983）には、「殿」に別の表現を加えて敬意を補っていることが指摘されているが、接尾辞についても同様の、次の指摘がある。

接尾語の場合も同様で、室町期には等持院殿様、鹿苑院殿様の形まで現われるのである。「殿」の敬意の低さを「様」で補った格好である。「殿御」の「御」をつけ加えたのと同様の言い方である。この言い方を背景にして「殿様」が独立して大名や旗本などを指すようになるのである。狂言に例が多い。

また、接尾辞的用法については、庶民に対しても「殿」が用いられていたことがあげられている。それは江戸時代になっても、「身分の低い者への軽い敬称」として存続していたという。菊田は次のようにも指摘している。

「殿」よりも「様」をつけた方が敬意が深まるので「修理様」と呼ぼうというのであり、逆に「殿」という接尾語の敬意が低いことを示すものにもなっている。

敬意が低いこと、身分が低い者へも用いられていたことが確認できた。今回の調査で得られた43例においても、21例が目上の人物からの用例で、19例は対等な関係（妻から夫への3例を含む）であった。残りの3例のうち2例は目下の人物からの発話であるが、これは後述する。ここでは先に、使用対象が人間以外で絶対的身分の上下を判断しがたい「弥兵衛鼠絵巻」における1例をあげる。

「あら珍しの白鼠殿や」（人間の左衛門から鼠の弥兵衛へ、集成363頁）

「弥兵衛鼠絵巻」は鼠の弥兵衛が主人公である。その弥兵衛が、商人の左衛門（人間）の前に現れ、枕元で語りかけ、福をもたらす。左衛門は弥兵衛の名前を知らないため、「白鼠殿」と呼んでいる。左衛門が「殿」を用いたのは、鼠を、福をもたらす大黒天の使いとして考え、敬っているからであろう。

接尾辞の「殿」は、敬意を表して相手を呼びかける際に、人間以外にも用いられていた。また接尾辞ではない「殿」は男性にしか用いられていなかったが、接尾辞の「殿」は、対称詞以外も対象として見ていくと、女性に用いられた例も見つけることができた。その中には、中古と同様に、宮中に仕える女御などに対して高い敬意を表す用例が存在した。男性に対する接尾辞の「殿」とは違い、特に敬意の高い表現として残ったようである。しかし同時に、男性に対する接尾辞の「殿」と同様に、地方の長者に仕える女房や乳母の名前に付けられた、敬意のあまり高くない用例もあった。

このことから、高い敬意を残したものは例外的で、接尾辞の「殿」によって表せる敬意は低くなっていたと考えられる。では、目下の人物から用いられていた残りの2例はどうだろうか。「明石物語」の同一場面で用いられているため1例をあげる。目上の人物への用例で、敬語と共に用いている。表面上は敬意を払った形だが、文脈上は相手を揶揄するなど、慇懃無礼で実質的な敬意を話者が持たない表現である。

「なういかに、刑部殿はいつ御出家候ふぞ。なにとて鬚をば剃り給はぬぞ」（明石三郎から多田刑部へ、集成246頁）

これは、舅である多田刑部の策謀によって妻と引き離され、一度は死にかけた明石三郎が、大軍を率いて報復に現れたところである。多田刑部は三郎によって討たれることを恐れ、慌てて出家したが、鬚を剃りそびれた。そのおかしな姿を見て、三郎は多田刑部をからかい、詰っている。

この例では、本来敬意を表す「殿」を用いることで、相手を揶揄し、嘲笑を表しているものと考えられる。こうした例は全部で6例（「弁慶物語」「明石物語」「御曹子島渡」にそれぞれ2例ずつ）あった。

また、「師門物語」に次のような例もある。

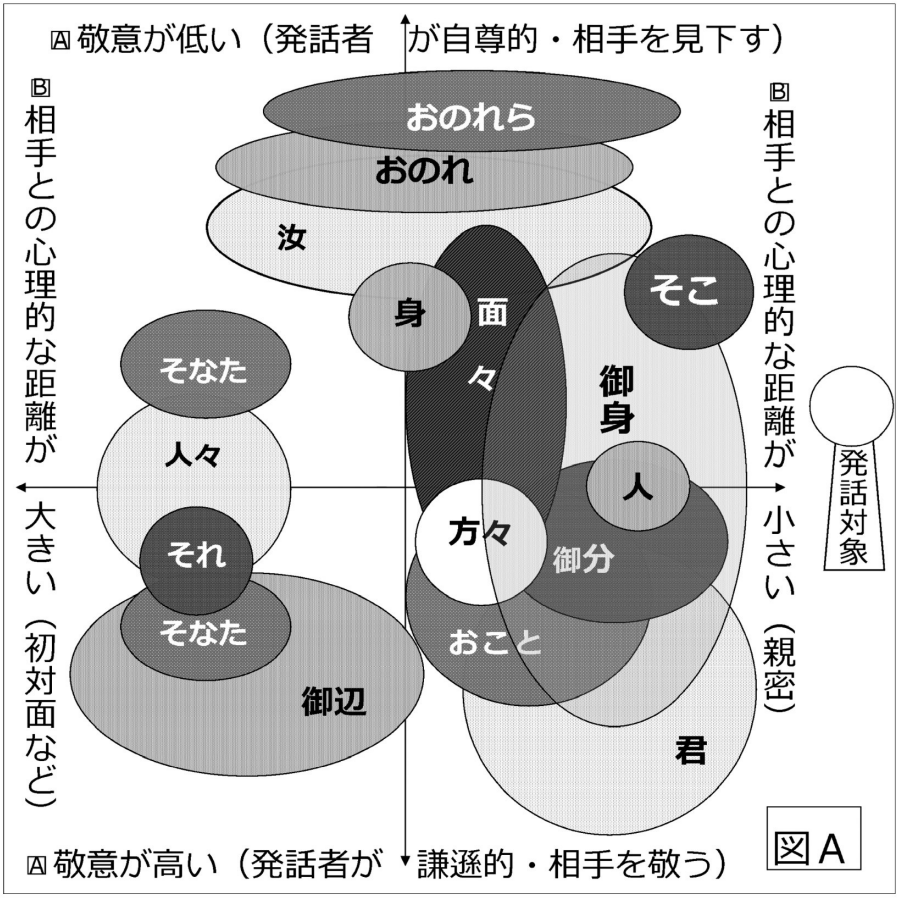
「まことか、刈田殿は浄瑠璃御前と申候息女を御もち候か」（中将から刈田兵衛へ、新大系下368頁）

これは国司として下ってきた中将が、刈田兵衛に娘の浄瑠璃（既婚）を要求する場面である。目上の人物である中将が目下の刈田兵衛に「殿」を用い、おだてている。刈田兵衛は強欲な人物であるため、褒美をもらい、おだてられて要求をのんでしまう。このように、対等か目下の相手をおだてる場面で用いられているものは合計5例（「弁慶物語」2例、「師門物語」3例）あった。

こうして見ると、接尾辞に限らず、「殿」関連語彙の全体の特徴として、次のようなことが考えられる。

「殿」という対称詞は、相手に対して敬意を表し得たが、それは必ずしも高くなくなった。むしろ敬意の対象でない相手へ使用することで揶揄や嘲笑、おだてといった負の意味合いを含有して用いられるようになった。使用対象はあまり制限されておらず、心理的な条件や発話態度によってさまざまに使用される。日常的で口語的な性格を持っていたと考えられる。

敬意の高さや、敬意以外にどんな意味合いを持たせているかは、作品ごとに異なる。成立年代や作者の位相などによっても

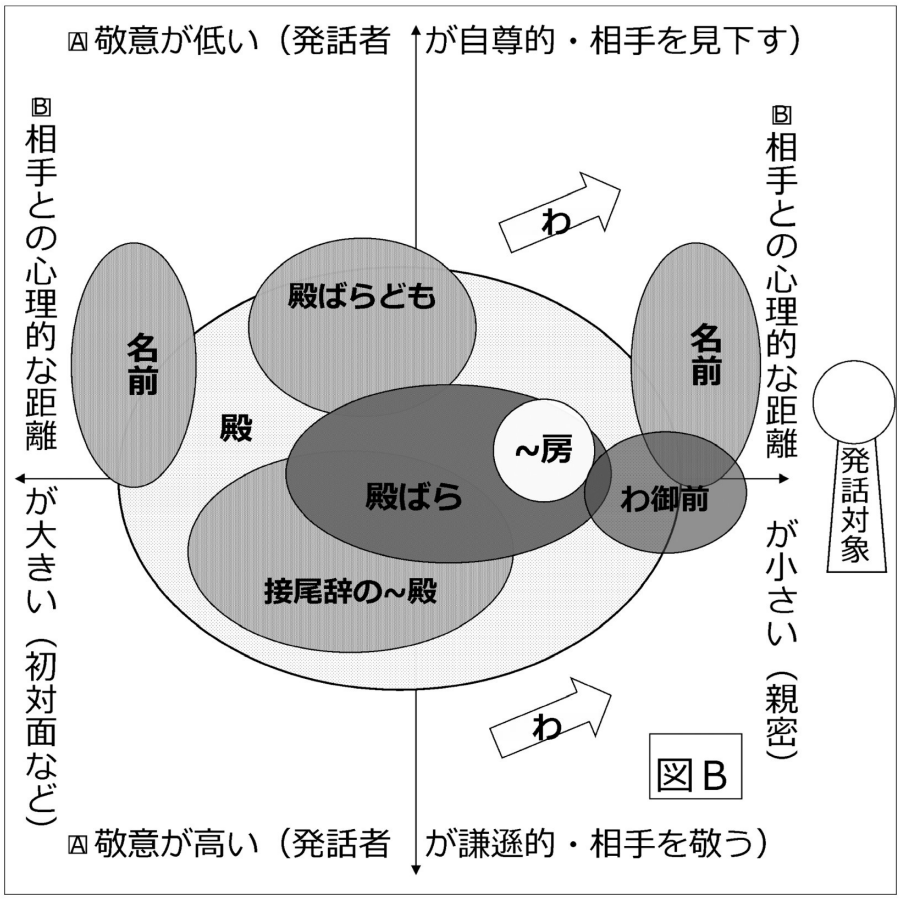


図A

変わるのだろう。本研究では詳しく考察できなかったが、このことは、御伽草子の作品ごとの特徴や発話態度、成立年代などを整理するために有効ではないだろうか。

4　御伽草子の対称詞全体について

これまで述べたもの以外も含め、本研究で詳しく考察した対称詞を図Aと図Bにまとめた。語数が多く、1つの図にすると見づらくなってしまうため、2つに分けた。図Aは代名詞を中心に、「御身」「汝」「君」「御辺」「御分」「おこと」「面々」「方々」「人々」「身」「人」「おのれ」「おのれら」「そなた」「そこ」「それ」を示した。図Bは「殿」「殿ばら」「殿ばらども」「接尾辞の～殿」「接尾辞の『～房』（接尾辞の『～坊』も含む。『～房』と表記）」「わ御前」「接頭辞の『わ』（『わ』と表記）」および「名前の呼び捨て（『名前』と表記）」を示した。各語について、以下の2つの観点、Ⓐ表す敬



意の高低（謙遜的か自尊的か）と、Ⓑ発話者と相手（対象者）との心理的距離の大小（初対面か親密か）をもとに整理したものである。

図の見方を説明する。右側であればあるほど心理的な距離が小さく、左側であればあるほど心理的な距離が大きい。上側であればあるほど敬意が低く、発話者が自尊的で見下した表現となり、下側であればあるほど敬意が高く発話者が遜った表現となる。右端中央に発話対象を置いたのだが、これは図中の語を用いた際の距離感や敬意の状態を視覚的に判断しやすくなるようにしたものである。それぞれの語の座標位置から発話対象へと矢印を引き、それが上向きならば敬意を含み、下向きならば見下していることがわかる。また、左右の長さが長ければ心理的な距離が大きく、短ければ小さいことがわかるというものである。なお、図Bの「わ」と書かれた矢印は、接頭辞の「わ」を表し、属性表現の名詞に

接続して対称詞をなすが、その際に、元の名詞よりもやや心理的距離が小さくなり、やや敬意が低くなる。そのため、矢印形にして、少し右上寄りに意味が変わることを表した。

発話者が目上の者であれば必ず上に位置するというわけではない。身分が上の人物から下の人物に向けての発話であっても、高い敬意を含むものであれば下に位置する。各表現を用いた人物の発話態度、心理的な関係を表すことに重きを置いたためである。

前述したように御伽草子では身分差による待遇表現の基準を設けることが難しいため、規則正しい分布をなす表を作ることは困難である。語彙間の相対関係と、語彙の使用状況を総合的に考えて分布を作成した。よって、この図にはある程度の幅を持たせてある。なお、私の主観的な判断に基づいている点が難であるため、後の研究によってより客観的に証明されることを熱望する。

重なっているものは、本研究に見られた用例の中でⒶとⒷという2点の基準において近い分布となったにすぎず、必ず言い換えられるという意味ではない。

各語についてここでは詳述できないが、このように多くの表現が使われ、そして使い分けられている。御伽草子の多くから、語彙の変化に敏感だった人々の、人称詞の使い分けを窺うことができる。物語を語り継いでいく際に、人称詞に対して研ぎ澄まされた感覚を大いに発揮し、心理的な要因によってよく使い分けているように思われる。全ての作品において上手に使い分けられているのではないが、作品によってはそのような語彙の性質を利用していると考えられるものもある。

例えば、「俵藤太物語」では、父から子への発話内で、ほめるときに「おこと」が、家督を譲るときに「御辺」が用いられている。「御辺」は他にも固い場面で用いられており、距離感を保って丁寧に敬意を表す表現だったと考えられる。その「御辺」と対照的に用いられていたのが「おこと」であり、こちらは親近感が相対的に高い。その違いを利用したのか、「諏訪の本地」では「御辺」が男性語、「おこと」は女性語のようにして用いられていた。

「弁慶物語」における弁慶は、敵対する人物に対して「御辺」「御分」「殿」「殿ばら」「わ殿」などと対称詞を何度も変えているが、それぞれに意味が読み取れる。おだてや脅し、揶揄などと状況によって使い分けているのである。一方、主従関係を結んだ義経に対しては遜って「君」を用いており、こうした言葉の使い分けによって弁慶の人物像や態度の変化がよく表されている。

5　おわりに

松本（1981）[注13]において、御伽草子の文章は荒筋的で心理描写や性格描写に乏しいことが指摘されている。確かに豊富ではないが、その点を人称詞で表現し、補っているのではないだろうか。

本研究では、場面や心理的な要因による人称詞の選択状況を

詳しく調べ、御伽草子における各語彙ごとの意味特徴を詳しく明らかにすることができた。それによって、待遇表現研究において、語の共用関係を基準とせずとも、場面や心理的要因から、人称詞の意味特徴を詳しく探ることができるとわかった。

また、人称代名詞と人物呼称に用いられる属性表現の名詞との境界が確固たるものではないことを示し、待遇表現における人称詞研究として、属性表現をも詳しく見る必要があることを示すことができた。

御伽草子における人称詞は、雑然としているようでいて、独特の基準によって細かな使い分けがなされていた。そのため、待遇表現研究対象としても、御伽草子の語彙研究対象としても有効と考えられた。

ただし、それぞれの作品における語の選択が擬古的か否かは、他の表現も含めて詳しく調べないとわからないため、それをいつの時代のものとして捉えるべきかには課題が残る。中世後期の語彙と一概には言えないだろう。

御伽草子の分類は、作品の内容によって行われているものが多いが、語彙の種類ごとの多寡によるもの[注14]もある。本研究では新たに、人称詞による語りの態度や人物造型の度合いによる分類の可能性を指摘しておく。

注

1　御伽草子という呼称を、本研究ではジャンルを表す総称として用いる。室町時代物語、室町時代小説、近古小説、中世小説、御伽文庫などといった呼称が存在するが、本研究では、作品の成立が室町時代に限らないことを踏まえて、この呼称を用いた。なお、渋川清右衛門によって版行された叢書に収録された23作品を示す際には「渋川版御伽草子」の23作品とし、「渋川版」を冠して表記した。

2　待遇表現研究において、語の共用関係をもとに基準を決めて整理していく研究方法として山崎久之『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院　1963年がある。

3　同時代の狂言資料、キリシタン資料、御伽草子における人称代名詞を比較した研究として佐野祐子「室町時代末期の人称代名詞――その用法と資料性との関連――」『国文』52お茶の水女子大学国語国文学会　1980年がある。

4　『日本古典文学大系　御伽草子』岩波書店　1958年　用例引用時には「旧大系」と表記した。

5　『新潮日本古典集成　御伽草子集』新潮社　1980年　用例引用時には「集成」と表記した。

6　『新日本古典文学大系　室町物語集（上）』岩波書店　1989年

7　『新日本古典文学大系　室町物語集（下）』岩波書店　1992年　用例引用時には「新大系下」と表記した。

8　『新編日本古典文学全集　室町物語草子集』小学館　2002年　用例引用時には「新全集」と表記した。

9 どの作品を選ぶかについては、あえて明確な基準を設けていない。さまざまな性格の作品を、なるべくたくさん取り上げられるようにすることを優先した。また、「小敦盛絵巻」「浦島の太郎」「御曹子島渡」はそれぞれ、「渋川版御伽草子」の23作品にある「小敦盛」「浦島太郎」「御曹子島渡」と同じ話だが、内容を含めて本文が大きく異なるため、取り上げることとした。可能であれば全作品を取り上げたいところであったが、時間の都合がつかず、断念した。

10 宮武利江「『御伽草子』の語彙と表現―待遇表現（1）人称代名詞―」『文教大学国文32』文教大学 2003年

11 徳田和夫『お伽草子事典』東京堂出版 2002年

12 菊田紀郎「との・どの（殿）」『講座日本語の語彙 語誌』佐藤喜代治編 明治書院 1983年

13 松本宙「御伽草子の語彙」『講座日本語の語彙4中世の語彙』明治書院 1981年

14 今西浩子「語彙からみたお伽草子の分類」『講座日本語の語彙5近世の語彙』明治書院 1982年